

# 入学から卒業までの 学びに寄り添う図書館

手すりライブラリアンになろう

6班：蔵本、伊勢、小室、山口、柴田、石津

# 課題

- 初年次にガイダンスを行っても、学生に内容を忘れられてしまう。
- 2、3年生の潜在的なニーズをフォローできているのか。学生とのかかわりが薄く、実態がわからない。
- 図書館のメニューは学生の学びに沿っているのか。

# 「高等教育のための情報リテラシー基準 2015年版」には...

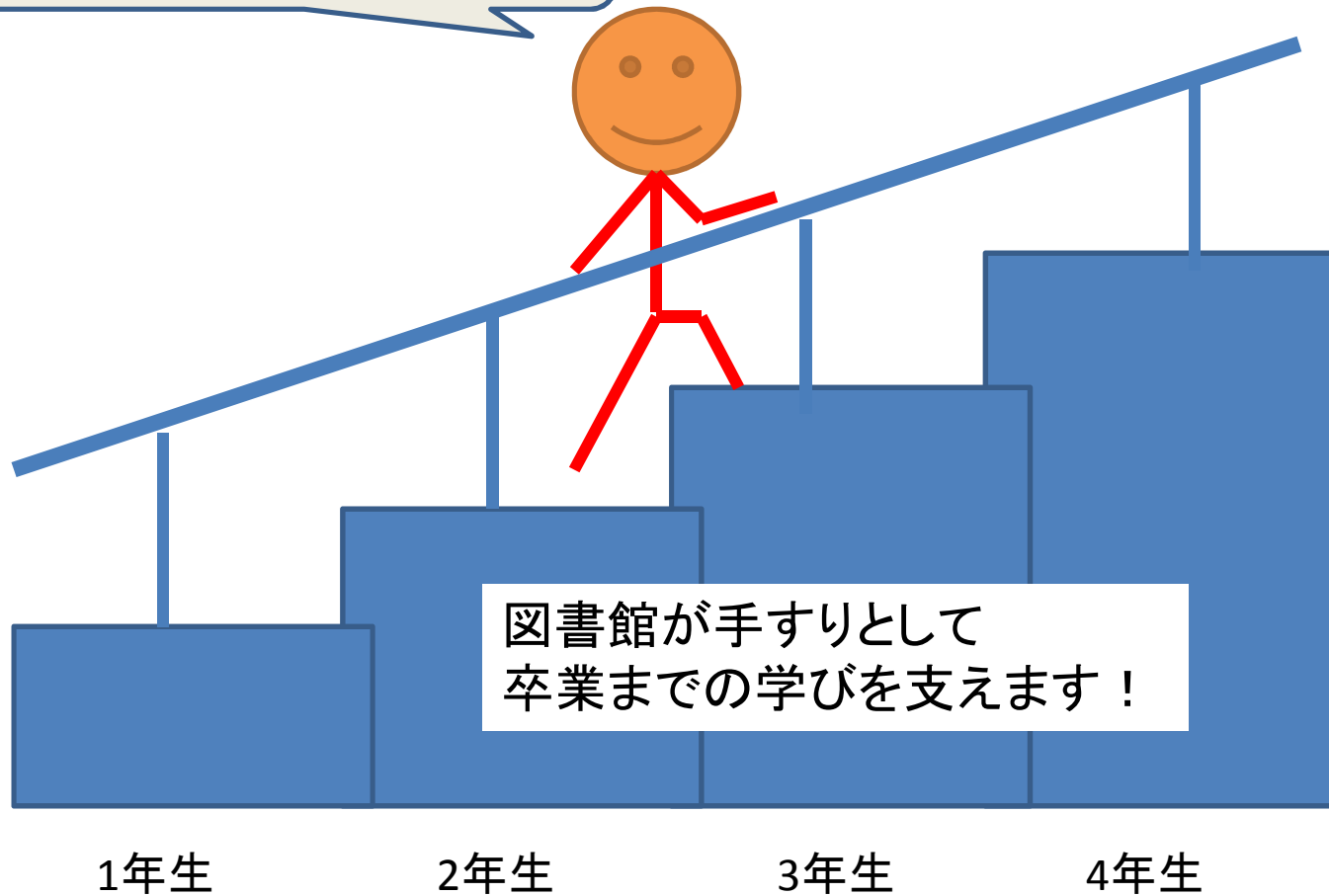
- 「学習者はこれらの6つの場面を後戻りしたり繰り返したりしながら課題解決を進めていく」  
(第5章 高等教育のための情報リテラシー基準)
- 「本基準をベースとして、さらに広く高等教育のさまざまな場面で活用されることを期待している」(1-3 本基準の対象)

# 大事ななのは「継続性」！

- 卒業まで寄り添って学生に関わっていく
- 体系表に沿って、教員と各学年での達成目標を設定し、共有し、信頼関係を形成する
- 最終的に4年生で、発信の仕方まで身につけられるように
- 最初は既存の授業に入り込む
- 学生に継続的に図書館を利用させるためには、初年次が大事

# あと戻りしたり、くり返したり

手すりがあると安心！！



# メタ設定

- 大学の規模
- 中小規模の単科大学、新入生100名くらい
- 図書館の職員数:10名(うち専任5名)
- 現在の状況
- 同僚、課長の同意は得られている
- 担当のA先生はわりと乗り気
- ※ A先生は必修授業「情報」のとりまとめ

# メタ設定

- 現在の時期
- 5月初旬(GW明け)
- 一通りガイダンスが終わったけれども、効果はいまいちだった

# メタ設定

- 部長はフライドポテトに目がない
- 機嫌がいいのは16時半くらい(アポ済み)
- 担当2人 + 課長 + A先生で提案



# 企画書

教員と連携した初年次生への学術  
情報リテラシー習得プログラム(仮)

# 企画趣旨

- 初年次生を対象に教員と連携した学術情報リテラシー育成プログラムを実施する。
- 当該プログラムは4年間を通じた体系的な育成事業の一部である。

# 目的

- 学術情報リテラシーの習得
- 学びの各段階における図書館利用方法の習得

# 内容

- 既存の必修授業「情報」の担当教員と連携し、学期を通して図書館員がかかわる授業をデザインする。
- また、振り返りのための資料と合わせて、振り返りに利用できる説明動画を用意する。

# 人的コスト

- 担当する職員はメイン1名＋サブ1名
- 授業は教員と職員1名の2名体制
- 1クラス25人 × 4クラス

# 関係部局、教員組織

- A先生＋授業にかかわる先生
- 学務課、FD組織（助言をいただく）

# 時間的コスト

- 授業回数は15回中5回
- 1回の授業あたり、授業準備4時間
- 内容策定20時間＋職員間の共有10時間
- =30時間
- (次年度以降は大幅に短縮できる見込み)

# 期待される効果

- 基本的なアカデミックスキルを身につける
- 学年が上がっても継続して図書館を利用する



# 評価方法

- 受講者へのアンケート
- 担当教員へのヒアリング
- 授業課題の達成度

# スケジュール

- GW明け 部長に提案
- 6月 館内会議、体制づくり
- 8月～9月 授業づくり
- 10月～12月 教員、各部署と調整
- 1月 シラバス掲載
- 2月～3月 実施準備

# まとめ

- 体系的な授業計画を作る必要
- 全学的な課題、教員との連携が必要
- 初年次の単発ではなく、「継続性」が大事
- 学生の学びに寄り添う「手すり」になる！

